

『花団子食家物語』 中巻 翻刻と注釈

Transcribing and Translating the Kibyoshi, *Hana yori dango kuike monogatari* (Part 2 of 3)

岡島由佳

Yuka OKAJIMA

大島瑞月

Mitsuki OSHIMA

大屋多詠子

Taeko OYA

前稿に引き続き、本稿では曲亭馬琴の黄表紙『花団子食家物語』の翻刻と注釈を行う。

紙幅の都合上、今号は中巻を取り上げる。下巻の翻刻・注釈と本作の英訳については次号への掲載を期す。本稿は、二〇一九年度の大学院演習の成果を踏まえたもので、執筆は岡島由佳、大島瑞月、大屋多詠子が担当し、最終的な加筆修正は大屋が行った。上巻・中巻の内容は以下の通りである。

1 (上巻) 精進方の屠蘇酒の娘 衣被姫が生臭方の大將干鯛に興入れする。干鯛方の家老初鮭の弟の口塩の鰯が酔って屠蘇酒の夫人菱餅

御前に無礼を働き、夫人の従者に打擲される。初鮭はそれを恨み、屠蘇酒を討とうとする。屠蘇酒の館に侵入した赤鯛は策麴に生け捕られ、胴切にされる。屠蘇酒の怒りは収まらず、衣被姫を取り返そうと考える。

(中巻) 赤鯛の死を聞いた初鮭・鰯は軍勢を調べて、屠蘇酒の館を攻める。初鮭・鰯兩人に諫言した柏餅はその怒りを買ひ、かさこの干物と干鰯に打擲される。柏餅と恋仲で、干鯛に仕える腰元の蛤は、柏餅を労る。菱餅御前の奥家老塩打豆炒は、屠蘇酒の命で、衣被姫に干鯛との離婚を告げるが、衣被姫はそれを受け入れない。柏餅・

蛤夫婦は、姫君を救い出して匿う。夫婦二人の夢に、姫君と三人の道行（掛合の寝言）。屠蘇酒の家臣、平昆布・初鮭・刺鯖が詰め寄せるが、柏餅は姫を隠した蒸籠の上にとつかと座って守る。

【凡例】底本には国会図書館のデジタルコレクションを用いた。作中には現代の人権意識に照らして不適当な表現があるが、江戸時代の資料的価値に鑑み、そのままとした。そのほか、翻刻の方針は、既発表の右上巻の翻刻に準ずる。

7、六才

赤鯛生け捕られ、あまつさへ胴切になりし事、鮭・鰯のかたへ漏れ聞こへければ、兩人ますく怒り、俄に軍勢を催促して屠蘇酒の館へ押し寄せんと企つる。

爰に衣被姫の付人、五月の柏餅はこの企てを聞き及び、かくては御夫婦中もいかゞあらんと人々をなだめ、様々諫言する。

（鰯）へちと²敵役と出ねばこつちの³さんぎやうが合はぬ。⁴強意見すりや⁵正月屋と思ふてか。

（柏餅）へすりや⁶どうけも大たに得心は⁷ござりませぬか、ホイ。

【注釈】

*1 五月の柏餅 端午の節句には柏餅を供する。「江戸の俗。端午に餅を製し裏に餡を裹み栴の葉を以、これを覆ふ。名づけて

かしは餅といふ。其角が附句に餅作るならの広葉を打合せなどせしは是也」（『俳諧歳事記』幟・菖蒲人形）。『守貞謄稿』には作り方が詳しい。

*2 敵役 歌舞伎で悪人の役およびそれを専門に演ずる俳優をいう。

*3 さんぎやうがあはぬ 悪事が露見したため「算用」が合はぬ意と、歌舞伎俳優「杉暁」をかけた。杉暁は、坂田半五郎（三代目）。江戸時代中期から後期の歌舞伎役者。宝暦六年生まれ。九代市村羽左衛門の門下。のち二代半五郎の門人となり、天明三年（二七八三）三代目を襲名。敵役・実悪を得意とした。寛政七年

（六才）



六月六日死去。俳名は寄曲、杉曉。屋号は正月屋。

*4 強意見 厳しく諫めること。「無分別のこは異見、一言二言

云上つて当分のこらしめ」(『当世乙女織』一)

*5 正月屋 歌舞伎俳優、坂田半五郎(初代)四代)の屋号。「代理の東里さまの、さじきがこさりまして、さかい丁をみました、滝のやと正月やに、こまといふ舞台がきついものさ」(『廓大帳』一)。

*6 どうけも大たに得心 「どうでも」と「道化も」、「大きに得心」と「大谷徳次」をかける。大谷徳次(初代)は江戸時代中期から後期の歌舞伎役者。宝暦六年生まれ。竹本繁太夫の子。三代大谷広次の門弟で、明和七年江戸で初舞台。道外方の上手として知られた。文化四年七月十七日死去。五十二歳。俳名は都町、馬十。屋号は田村屋、丸屋。「大谷丸谷の谷間より聳ておかしみの峰は。山の腹を抱ゆる立かくし。姿見の池煎餅に似て丸く。瀬戸物長者の古跡に残る。愚蠢の鏡岩眉毛のさがり松は。おかしくつてならずの森の内にありて。舞台達者の明神立せ給ふ。」(『戯子名所図会』巻二・徳次山)。

【挿絵】

干鯛の執権初鮭(毘沙門亀甲紋)と弟の鱈(七曜の紋様)が、屠蘇酒の館へ押し寄せようと企てているところ。二人の間には衣被姫の付人柏餅が座っている。

(岡島)

8、六ウセオ

1 爛酒、2 銚子呑みに逆ふと、柏餅がいさめに鱈・鮭の両人大きに怒り、己が手下の五月節句の3 かさこの干物、同じく干鰯にい、つけ、柏餅を散々打擲させる。

4 両雄並び立、ずと、かさこ・干鰯は、五月の節句ごとに柏餅5 落ちを取られるを口惜しく思ひ、此時、6 新道の闇の夜ときて、7 犬の糞で仇を取る。

(かさこ) へ叩け、8 叩き役と出かけろ

(干鰯) へこんな野郎は9 思入10でつちてこますがいよい。

(柏餅) へア、腰も立、ぬほど打たれるとは、11 あんたる因果じややら、ほんに12 しんこな事ではある。

かしわもち、13 引き物、悲しさは腰も立、ず、難儀の折から、干鯛の腰元、14 雛棚の 蛤は兼ねて柏餅と訳のある中故、いろく 15 労りさすり介抱する すへの世までも16 柏餅のさすられるも此いわれなり

(蛤) へわしは16 恋路の五月闇17のぼりつめたる柏餅、18 うまひ中ではないかいな

はまぐり、19 文句をこじ付ける

(柏餅) へとかく19 濡れ事師といふものは、かうした目に遭ふものさ

20 山椒入の味噌じやアあるめへし

(六ウ七オ)



【注釈】

- *1 燗酒 温めた酒。
- *2 銚子呑みに逆ふ 「忠言耳に逆ふ」の洒落。柏餅の諫言が耳に痛く、鱈と鮭は大いに怒る。
- *3 かさごの干物 節句にカサゴの干物を供する。「嘉例か、さぬ古風残りて：五月の煮物、何方も路にかさご・筍」（『水濃往方』四）。
- *4 両雄並びたらず 力の匹敵する二人の英雄は同時に現れれば、必ず片方が倒れるということ。
- *5 落ちを取られる 良い評判を得る。「あの曲中はあどけないので落を取るのさ」（『浮世床』二・上）
- *6 新道 町家の間の小路。「よるべさだめぬころび妻、このしんみちにすみなれて、ひとの心をうわきにする」（『江戸生艶氣樺焼』上）
- *7 犬の糞で敵を取る 卑劣な手段で復讐をすること。「犬の糞で敵を取るやうだが、此間幸八に打ちのめされた意趣返し、思入食つてやらうちやあねえか」（『敵討噂古市』六幕）
- *8 叩き役 「敵役」の洒落。
- *9 思入 思い切り。「わたしがところへつれてきなせへし、をもひれふって見せやしゃうと」（『古契三娼』）
- *10 でつちこます 「でつちる」は捏ねる意。『俚言集覧』に「でつちる 埴也。ねる事也。ねとでと通ず」とある。「うなされた

夜は女房にでつちられ」（『川柳評万句合』・明和元・鶴五）。また、「こます」は「…してやる」の意。「おらも名乗ってこまさふと軍場へ出て」（『源頼家／源実朝』鎌倉三代記）九。柏餅なので、殴るところを「でつちる」と言った。

*11 あんたる 何たる。何とした。「こりやあんたる因果ばね。めつきめつきいたす御免あれ」（『平家女護島』三）。柏餅の「餡」を掛ける。

*12 しんこな事 しん粉。精白したうるち米を乾燥してひいた粉、またその粉で作った餅のこと。「粉シンコ 今世餅之一種」（『書言字考節用集』六）。柏餅もしん粉餅の一種。「しん粉」と「辛気」、いらいらする気持ちをもじった。「Xinqina（人に不快を与えること）」（『日葡辞書』）

*13 引き物 供応の膳に添えて出す肴や菓子のこと。

*14 雛棚の蛤 上巳の節句には蛤を供す。昔は人形の調度に蛤を使ったという。「むかしは雛遊びの調度も今の如く美麗なるを用ひず、飯も汁も蛤の貝に盛て備へけるとぞ」（『嬉遊笑覧』六下・児戯）。「近世迄雛祭には物を供するに蛤殻を用ひしと聞く。今三都は蛤を供すも昔殻を用ひし遺意ならん」（『守貞謄稿』）

*15 柏餅のさすられる 「柏餅」は形が似ていることから一枚の布団にくるまって寝ること。さすって起こされる描写が散見する。「ひとりねにわれはふとんの柏餅かはひといいふてさすりてもなし」（『万載狂歌集』十一）。「とつさま内にか」「アイとつさまは

今柏餅になつて寝てさ」（『ヲ、そんなりやさすりおこしや』（『聞上手』）。

*16 恋路の五月闇 恋のために理性を失った様子を指す「恋の闇路」と「五月闇」を掛ける。

*17 のぼりつめる いい気になってすっかり夢中になる。「わか

い時は二度はない。有頂天までのぼりつめて、親にくろうをかけるはばかよ」（『仮名文章娘節用』）。餡を「詰める」意も掛けるか。

*18 うまい中 男女の親密な関係。「傍でちりちり千鳥やかんかん鴉がうまい中じゃとな」（『お染久松色読販』大切）。柏餅と蛤が美味い意と掛ける。

*19 濡れ事師 女たらし。「世の中は恋のわたりのうきふねや竿の雫も濡事師、おもひよるべにさしよする」（『浪葩准朝妻』）

*20 山椒入の味噌 柏餅に餡や味噌餡が使われることから。「さんしょみそいづれあやめのかしわ餅」（『川柳評万句合』明和元・智六）。また「ころり山椒味噌」はべろりと平らげる意から転じて、相手に心を奪われてしまうことやころりと転がる様をいう。「吾儕等の様な老爺でさへ、実はころりと山椒味噌、一口嘗めたい気の出るお嬢」（『清談若緑』二・四回）、「久米の仙人目をまはし、ずんでんころり山椒味噌」（『風来六部集』下・自序）、「蒲団きて昼寐にころり山椒味噌あんも節供は柏餅かな」（『徳和歌後万載集』二）。

【挿絵】六ウでは、鉢の上で、柏餅がカサゴの干物や干鰯に捏ねられて（殴られて）いる。七オでは殴られて乱髪の柏餅をさすりつつ、蛤が口説いている。

（大屋）

9、七ウ八オ

菱餅御前の奥家老塩打豆炒は、屠蘇酒の仰せを受け、衣被姫の方へ参り、御離縁の事を述べければ、姫君大きに驚き給ひ、かやうなる事は干鯛の知り給ふ事にあらず、事の1実否のわかるまで帰る事思ひもよらずと厳しく仰せ出さる。

衣被姫・腰元餅米のはぜ・腰元白酒・腰元月見の団子

（月見の団子）へ女の中の2豆炒さん、3団子は損気の基にて、そのよに4世話を焼き飯の、5煮しめな事にあはふより、マア6白酒の徳利と、思案定めていなさんせ。サアくくくべんとうがら聞、たふごさんす。

姫君の腰元共、すは御夫婦中の大事ぞとてんでに薙刀買い込んで、豆炒を取り囲み、返答いかにと詰めかくる。

（月見の団子）豆炒が8おこしなされて人を9駄菓子賺さうとはイヤ10甘口な人さんじゃ。

（亥子のお萩）ただしはこの11亥の子のお萩が、12おいどを叩いて13いなさうか。

（豆炒）へなるほど至極御尤も、これは一ばん14出そくない、言葉



（七ウ八オ）

の塩炒砂糖打¹⁵豆たくさんの中へ、ホンニまああられない。

【注釈】

- *1 実否 真偽。「実否分明ならざる時は、死後の悪名をも伝へ伸べきかと用心仕り」(『武道張合大鑑』四・二)
- *2 塩打豆煎 前号五ウ注8参照。「茶を沸らしつゝ、汲もて来て、先親兵衛に薦めたる、茶頓^{ちやうけ}は鹹^{ちやうけ}き塩打の、豆炙^{まあい}は」(『南総里見八犬伝』九・一一〇)。「豆煎」は、女の中に男が混じっていること。「相手欲しやの馬鹿口に、女の中の豆煎と成って」(『恩愛二葉草』三・九章)。
- *3 団子は損気 「短気は損気」をもじる。短気をおこすとけつきよくは自分の損になること。
- *4 世話を焼き飯 「世話を焼く」の「焼く」と「焼き飯」を掛ける。
- *5 煮しめな事にあはふより 「みじめ」をもじる。
- *6 白酒の徳利と、思案定めていなさんせ じつくり、よくよくの意の副詞「とつくり」と「徳利」を掛ける。白酒は「徳利」から引き出される。
- *7 べんとうがら 「返答」と「弁当」を掛ける。
- *8 おこしなされて 「お越しになる」と菓子の「おこし」の意を掛けるか。
- *9 駄菓子賺さう だめすかして落ち着かせる意の「だまし

(だます)」をもじる。

- *10 甘口 あま味の強いもの、料理を甘口にするこの意と、浅はか、愚かの意を掛ける。「越中屋善次郎とて、ちとあま口な男なれば」(『諸道聴耳世間猿』五・二)
- *11 亥の子のお萩 十月の最初の亥の日。はた餅を作って食べ、または配り物とし、炬燵を開いた。「炬燵は亥の子に開き、亥の子に牡丹餅をするも牡丹の縁によるなるべし」(『忠臣蔵前世幕無』)。お萩は「はぎもち」の女房詞。はたもち。「牡丹餅：団めずに器にもりて、その上に小豆のあんをかけたるを萩の花といふ。女詞には、おはぎともいへり。これは萩の花に似たればなり」(『世事百談』四)
- *12 おいど お尻。女性が用いた語。「女と言ふものは尻だのけつだのと言ふものじゃアない、いしきとかおいどと言ふものだ」(『魂胆夢輔譚』初・中)
- *13 いなさうか いなす。帰す、おっぱらうの意。「いかさま賢ふも見へんわろたちじや。べしてのこともありやせまい。いなしてやるかいな」(『東海道中膝栗毛』六・下)
- *14 出そくない 出損ない。出そびれる。良い出方をしない。「『肝心要の閨中がすかぢや』『オット、旦那、すかへはどうぢやな』『ホイ、今度は出損ふた』」(『けいせい浜真砂』四幕)
- *15 豆たくさんの中へ…あられない 「豆」は女のこと。「あられない」は、そうあってはならない、ふさわしくないの

意。「あられもないこと、たれがさういわんすぞ」（『難波鉦』三二）。
米菓の「あられ」も掛けるか。

【挿絵】衣被姫を中心に、右にはもち米のはぜ、白酒、左には月見の団子、ぼた餅（お萩）が各々刀や薙刀を持ち、奥家老の豆炒を取り囲んでいる。

（大島）

10、ハウ九才

柏餅は鰯鮓が悪事を見限り、かくては姫君の御身の上も危ふしと姫の御供して鮓を忍び出、しるべの方へ匿ひ申す。柏餅夫婦、この程の心遣ひにや、とろくろと微睡むうた、ねに夢を見る。なんぞ一狂言筋になりそうな夢かと思ひの外、何にもならぬ無駄な事なれど、そこが夢の事ゆへ、作者の力にも及ばず。

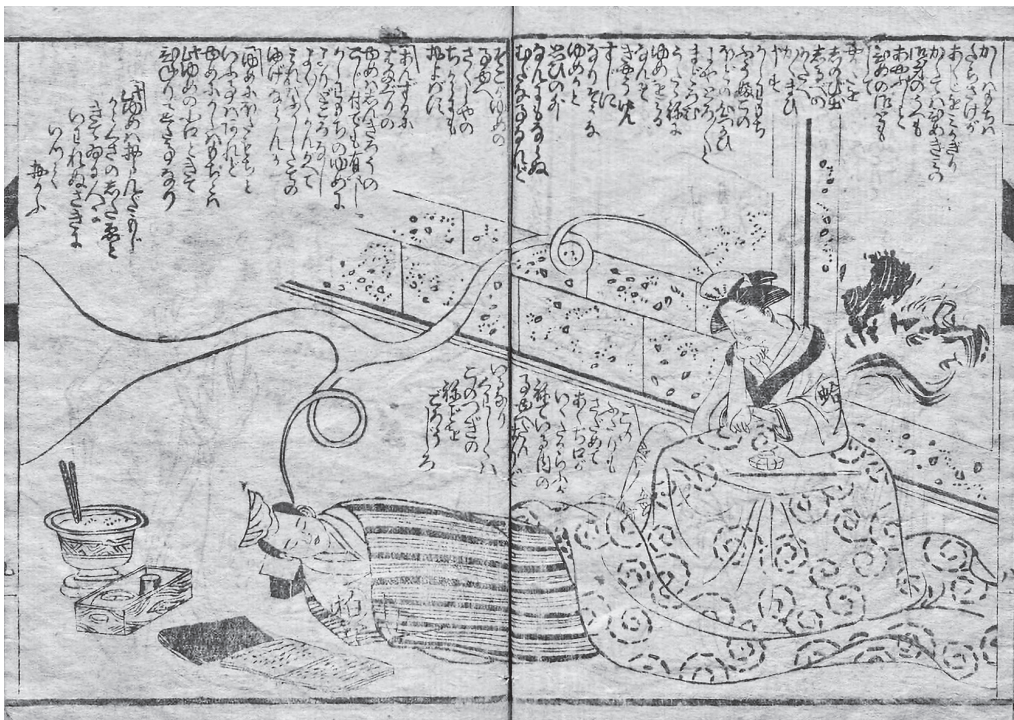
へ案ずるに 蛤の夢は²蜃気楼のこじ付でも有べし。柏餅の夢に³抛り所なし。よくく考へてみれば、蒸かしたての湯気ならんか。

へ⁴夢に牡丹餅といふ事はあれど、夢に柏餅とは此夢の⁵小口ときてひねり過た事なり。

へ此夢は⁶阿蘭陀文字、唐草の下絵ときてゐる。人に言われぬ先に言つておかふ。

へこの二人も定めて⁷悪地口が言、たからふが、寝ている内の事ゆ

（ハウ九才）



へ、だんまりでいるなり。詳しくはこの次の寝言をごろうじろ

【注釈】

*1 狂言筋 芝居（歌舞伎狂言）の筋。

*2 蟹気楼 昔、中国で、大蛤の蟹が気を吐いて楼閣を描くと考えて名づけられたことから、挿絵の夢の吹き出しが蟹気楼のようだという。「赤城霞起て、蟹気楼（シンキロウ）を抬出し、緑波天に続きて、珊瑚島をめぐれり」（『椿説弓張月』拾遺・四六回）

*3 蒸かしたての湯気 これも挿絵の夢の吹き出しを湯気のように見立てる。

*4 夢に牡丹餅 思いがけないもうけ物が手に入ること。「思ひがけなくひろつた百両、ほんに夢に牡丹餅で、それを貸し出し金があふへ」（『三人吉三廓初買』二・三）

*5 小口 物事のはじまり。きつかけ。糸口。「およそ人の知った、口ぢかひめりやすの分、小ぐちのところを申やしやう」（『江戸生艶気樺焼』上）

*6 阿蘭陀文字 オランダ語を記すためのアルファベット。阿蘭陀いろは。特に筆記体のものを指すことが多い。「うしのよだれやつぱりおらんだ文字だ」（『小紋雅話』）「近年は猫もしやくしもまにあいの松花堂をやらかして書ちらかすもんだから紅毛もじの素読をするやうでむてへよめねへのがございやす」（『青楼日記』通客之品定）。夢の吹き出しが、筆記体のアルファベットの

ようにくねることをいい、唐草模様を描いた下書きようだと続ける。

*7 悪地口 つまらない洒落。駄洒落。

【挿絵】

蛤は唐草模様のこたつで肘をついてうたた寝をしている。柏餅は炬燵に当たりながら、布団を「柏餅」のように布団にくるまって寝ている。（大屋）

11、九ウ十オ

掛けの寝言

へ1芭蕉翁の発句に曰く、かきよりも海苔をば老の売りもせで、御法よ法の道程に踏み迷ふたるわれくは

へ3いもでまろめた恋の山 越へつ、来ればいつしかに 芋、唐の芋

へ同じ思ひは5ふかしたて 6今の憂き身に奈良坂や 8餅につく 7兎手柏の

へ蛤ならぬ9ぐりはまの その10すゞめぎもどこへやら

へ11菌に衣被着せぬとはい、立られし12人の口

へ戸にもかくにもあぢきない13浮世の秋に泣き暮らす へ蒸蛤に

柏餅 かしもち

此衣被も諸共に きぬかつぎ もろ

茶釜蒸籠 ちやがま せいろう

茹で鍋 ゆ なべ

もはや16ふけたる鐘の音じやナア。

(蛤) へ17切幕から18のりうり公御入りと言わせた。

(蛤) へ19里芋、八百屋の20舞台顔ときて21親はねへかと申します。

(蛤) へわたしはなりは古人22中富が23乱髪夜の編笠の所作ごとくきておりませう。

(里芋) へこれから24一里ずいきにして、晩には早く25ねいもしたい。

何の事だか、ねつからわからず、そこが寝言ゆへ、その筈の事也。

【語釈】

*1 芭蕉翁の発句に曰く、かきよりも海苔をば老の売りもせて

『続虚栗』（貞享四年刊）春之部に「老慵」と前書し、「蠣よりは海苔をば老の売もせて 芭蕉」で所収。老いの身ならば、重く、しかも生物の牡蠣などよりは、軽くさっぱりした海苔を売るほうがふさわしいのに、の意。『山家集』に「串に刺したる物を商ひけるを、何ぞと問ひければ、蛤を乾して侍るなりと申しけるを聞きて」と詞書して「同じくは牡蠣をぞ刺してほしもすべき蛤よりは名もたよりあり」という西行の歌を踏まえる。芭蕉の句につい

(九ウ十オ)



て、『去来抄』では「本歌は同じ生物を売るとも、かきを売れ、石花^{かき}は看^{かん}経^{けん}の二字に叶ふといふを、先師は生物を売らんより海苔^{のり}を売れ、海苔は法^{のり}に叶ふと、一段すり上げて作り給ふなり」と解釈する。

*2 御法よ法の道程 芭蕉の句の「海苔」から「法」を引出す。仏法の説いた道。

*3 いもでまろめた恋の山 「色で丸めた恋の山」のもじり。「恋の山」は積もる恋の思いを高い山にたとえていう語。歌語としてしばしば用いられた。「東男に都の女郎、いきと情を一つに寄て、色で丸めた恋の山」(『神霊矢口渡』四)。

*4 古里芋、唐の芋 「古里」と「里芋」を言い掛ける。唐の芋はサトイモの栽培品種。「唐来は唐よりきたといふ心なり。まことは唐より渡つた物ではなひが、たしなひものをいふなり。唄にも、唐から下つた唐の芋など、いふ。これも唐の芋を賞たることばなり」(『鹿相案文当字揃』)。

*5 ふかしたて 「ふかしたて」は、蒸してまだ時のたためこと。薩摩芋にいうが常。「顔は真赤にして、ふかしたての如く」(『浮世風呂』三・下)。

*6 今の憂き身にならさかや 「奈良坂」は奈良市から京都府相楽郡木津町に通じる京街道の坂道。また、その一帯の地名。『万葉集』以来の歌枕。今の憂き身に「なる」と「奈良坂」とをかける。「奈良坂の。児の手柏の二面」(謡曲「百万」)。「なるとなら

ずと奈良坂や、この手柏の二人の女」(『妹背山婦女庭訓』道行恋の苧環)。

*7 児手柏 ヒノキ科の常緑低木または小高木。(葉の表と裏が似ているところから)言葉、心の表裏を両方に使い分けること。

また、表裏両様に使うこと。ここでは、奈良(大和)の「児手柏」と「柏餅」とをかける。「児手柏は大和国添上郡にあり。この図すなはち同郡番條村専福院より得たるものをもて写生とす。柏の子破裂ざる已前は。人の手のごとく。五ツの指ごとくく備る。既に破裂るもの。亦掌をひらけるに似たり」(『敵討児手柏』)。

*8 餅につく もてあます。「半分は落し斬しを餅につき」(『川柳評万句合』松三)。

*9 ぐりはま 「はまぐり」の倒語。物事がぐいちがいになること。逆。「する事なす事こふぐりはまになるといふは、トふさいでだんまり」(『甲斐夜の錦』)。

*10 すゞめぎ 「蛤」(雀蛤となる)の縁や、多弁の意の「雀」と、「ささめき」(男女間のむつごと。恋のささやき)の意をかけるか。

*11 菌に衣被着せぬ 「菌に衣着せぬ」と「衣被」を言い掛ける。「菌に衣着せぬ」はつつみ隠すことなく、思ったままを率直に言う意。

*12 人の口へ戸にもかくにも 「人の口に戸は立てられず」と「ともかくにも」を言い掛ける。

*13 浮世の秋 人生の不運、不幸などのたとえとする。「よしや一度栄ゆるとも、凡生さとしいけるもの、浮世の秋にあはざらめや」(『春色梅児誉美』後・序)。

*14 茶釜 湯を沸かし、あるいは茶を煮出すのに用いる釜。でたらめの意もある。寝言ゆえ、でたらめを言う意をかけて、以降、料理器具を続ける。

*15 蒸籠 釜の上にはめて、糯米、団子、饅頭などを蒸す容器と、蒸し菓子、蕎麦などを入れて運ぶのに用いる器の二つの意がかかる。後者は(十ウ)の「御菓子所」と書かれた挿絵参照。

*16 ふけたる 芋などが「蒸ける」と夜が「更ける」の意をかける。

*17 切幕 歌舞伎劇場で、花道の出入口にかける座元定紋付きの引きあけ幕。「揚まく。切まくとも云、花道の出入口にかける、花色地に白く座元の定紋を染る也」(『劇場新話』)。

*18 のりうり公 糊売と、源範頼をかけるか。冒頭の芭蕉の句の「海苔」から「糊」を導くか。糊売は手桶に入れて売り歩く。

*19 里芋、八百屋 里芋は衣被姫のこと。『乱髪夜編笠』の所作で演じた「八百屋お七」をさかすか。

*20 舞台顔 舞台で演技をするためにつくった顔だち。また、舞台に立った時の顔。「鼻が高く見えて、舞台顔ぶてがほが美しく見えたさうさ」(『浮世風呂』三・下)。

*21 親は無へか 親がこの場に居合わせたら、子のすばらしい芸

をどんなにうれしく見るだろうという意。人の技芸などをほめるときに言うことば。親を拝め。「歌舞の妙なるを見て、親はないかとほむる事、尾張あたりにては今もいへり」(『於路加於比』一二)。

*22 中富 初世中村富十郎の略称。歌舞伎俳優。安永・天明期を代表する若女方。俳名慶子。享保一四(一七二九)年京・佐野川座の色子となり、江戸に下って享保一六年に中村富十郎と名のる。

安永四年刊『役者酸辛甘』(江) 若女形之部「極上上吉 中村富十郎 森田座」には、「扱夫より錦江丈との拍子舞所作大出来く」それに付ても春の夜のあみがさ江戸ぶしにてのしよさ大あたり今さら名人といふもあだまきながら申さねばならぬ此所作は寛保二年戊辰春中村座にて娘曾我凱陣八島狂言に致されて大あたりでござつたそれよりして今年まで凡二十三年其比も今も同じ年ばへとある老人のうわさ誠に妙なる哉く」とある。

*23 乱髪夜の編笠 浄瑠璃物(河東節)。寛保二年(一七四二)春、江戸中村座『娘曾我凱陣八島』の二番目の八百屋お七(中村富十郎)の狂乱の所作に用いたのが初演。内容は、当時流行の歌を寄せ集めたもの。「夜の編笠の所作。浄瑠り江戸河東大評判大當り」(『歌舞伎年代記』寛保二戊年)。

*24 ずいき サトイモ類の茎。黒みを帯びた赤紫色で、生または日に干したものを食用にする。「ずいと(一氣に)」の意をかける。

*25 ねいも サトイモの葉柄の基部にできるいわゆる芋・孫芋。「根芋」と「寝も」をかける。

【挿絵】

前丁の柏餅夫婦の夢を吹き出して描いた図。衣被姫（袖に「芋」）は手に杖と笠を持つ。背景には墓塚が描かれる。蛤は手桶を前に抱えて持つ。柏餅は着物の柄が以前とは変わっている。

（岡島）

12、十ウ

柏餅夫婦宵より1舟を漕ぎ出して、夢おもしろき真つ最中、にはかに屠蘇酒の家臣²初春の平昆布、初鯨の執事³七月の刺鯨、

（十ウ）



衣被姫を渡せと詰めかくる。柏餅は⁴一世の浮沈と姫を⁵蒸籠の中へ隠し渡さじと争う。

（柏餅）へマア／＼お鎮りなされ。⁶そう蒸籠では⁷一ツ荷な渡されませぬ。

（昆布）へ蒸籠の上にいるから⁸蒸ける氣てあんべい。衣被を匿ひしとは⁹とくより¹⁰星を刺鯨だ。なんと¹¹昆布も透くまいがや。

【注釈】

*1 舟を漕ぐ 居眠りをする。「ねふり気さし、とろ／＼とふねこぎけるに」（『怪談御伽童』二）

*2 初春の平昆布 海藻の一つ。海藻の中では、最も大きく長く、北海道から千島および三陸海岸に産出される。葉も根も食用とする。「こぶ」とよび、「よろこぶ」に掛けて新年の蓬莱台など、めでたいものに飾る。「和産諸国に多し。尤も東北海のもの上品とす。和俗正月に用る事、よろこぶの義によれり。」（『滑稽雑談』正月上）

*3 七月の刺鯨 鯨の背を開き、塩漬けにして二匹を重ねて一本の串に通したものの。季語、秋。「すなはち七月にもちゆるさしさはの事じや」（『私可多咄』一）

*4 一世の浮沈 「一世の」の形で下にも名詞を伴い、一生の一度あるかどうかの大事な、の意を添える。「八百屋、肴屋いさみをなして、しきしやうの庖丁人、此威勢、一世の思ひ出也」（『好

色一代男』八一三。「浮沈」は栄えることと衰えること、うきしずみ。「此道をもてあそぶ人、身上の浮沈、はり合の時にある事なれば」(『難波物語』)

*5 蒸籠 釜の上にはめて、糯米、団子、饅頭などを蒸す容器。

木製で、方形または円形のものがある。底を簀子にし、湯気を通して蒸す。井楼。せいろ。「せいろをかさねかさねのめでたさはいくらありてもあかの強飯」(『徳和歌後万載集』七)

*6 そうせいろうでは 「そう急いては」と「蒸籠」を掛ける。

*7 一ツ荷な 蒸籠の数え方「一ツ荷」と、どうしてももの意の副詞「いっかな」を掛ける。

*8 蒸ける 芋などが、むされて柔らかくなること。「ふけるのは同じ畑のとうの芋」(『俳風柳多留』九四)

*9 とくより 早くから。以前から。「我も頓より気の付かざるにはあらねども」(『根無草』前一二)

*10 星を刺鯖 「ほしを指す」と「刺鯖」を掛ける。「ほしを指す」とは見破ること、図星をさすこと。

*11 昆布も透くまいがや 「昆布」と「五分」を掛ける。「五分も透く」はごくわずかの隙間もない、配慮が行き届いていて、少しの手抜かりもないの意。「気性といひ人物五分もすかぬといふ色男」(『青楼快談玉野語言』三)。

【挿絵】

『仮名手本忠臣蔵』十段目の天川屋義平の場面を摸す。捕り手の昆布達は義士風の衣装をつける。柏餅が明けさせまいと座る蒸籠には「深草瓦町 御菓子所 今津屋」とある。「深草瓦町」は「浅草瓦町」を指すか。「今津屋」は未詳。

(大島)
(中巻終)